

日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



パリ 反テロ集会

1月11日、レピュブリック広場。風刺紙銃撃事件などの犠牲者を追悼するために多くの人々が集まった (AFP=時事)

**報道の自由 暴力で阻むな
日本人人質事件で声明**

ジャーナリストに対する非道な暴力がパリと中東で続いた。私たちの仕事と言論の自由に対する重い問いかけとなった。

過激派組織「イスラム国」はジャーナリストの後藤健二さんら2人を拘束し脅迫した。後藤さんは危険を知りつつ現場取材に入った。人ごとではない。1月21日、「自由な取材を阻むもの」と解放を求め声明を発表した。2月1日、殺害映像が公開され「暴力を使ってジャーナリズムを脅かす行為」と非難声明を出した。伊藤芳明理事長と相談し、理事の了解を得た。取材で危険にさらされた日本人記者に関して日本記者クラブが初めて出す声明となった。

ジャーナリストが刊行物の表現ゆえに殺されたパリのシャルリ・エブド襲撃事件(1月7日)。同紙は預言者ムハンマドの風刺画を翌週号の表紙に載せた。この風刺画を転載するかどうか、世界中のメディアが割れ、日本でも分かれた。表現の自由の限界はあるのか、どこまで自制すべきか、議論は続く。

新研究会「イスラムの視点」などで、多角的に考えたい。Ⅱ面に声明全文など関連記事(中井良則)

今月のことば

「イスラムの気高い教えや原則をかたため、このような野蛮な行いが行われたことに対し遺憾の意を表します」人質事件を受けて会見した駐日アラブ外交団の「声明文」から(1・27)

「万人に課す消費税ではなく、富裕層に高税を課し、若い世代の所得税を引き下げる政策が必要」

ピケティ・仏経済学者(1・31)

音声アーカイブ公開の20人

(*印は会見詳録あり・肩書は当時・日付は会見日)

佐藤栄作 首相	1970. 4. 10
田中角栄 首相	1972.10. 6
フォード 米大統領*	1974.11.20
三木武夫 首相	1975. 1. 16
司馬遼太郎 作家*	1976. 5. 28
宮本顕治 共産党委員長	1976. 6. 4
福田赳夫 首相*	1977. 1. 17
植村直巳 冒険家	1978. 9. 12
鄧小平 中国副首相*	1978.10.25
大平正芳 首相	1979. 1. 22
アラファト PLO議長	1981.10.14
サッチャー 英首相	1982. 9. 21
胡耀邦 中国共産党総書記*	1983.11.26
森繁久弥 俳優*	1984. 7. 18
井上ひさし 作家*	1986. 5. 26
土井たか子 社会党委員長*	1986. 9. 29
ハルバスタム 米ジャーナリスト	1987. 5. 25
ゴルバチョフ ソ連大統領*	1991. 4. 19
金大中 韓国前民主共同代表	1995. 4. 12
マンデラ 南ア大統領	1995. 7. 5

以前の会見は約3800本にのぼるカセットテープやオープンリールの音声録音が残っていた。テープが劣化した貴重な資料が消えてしまう前にデジタル化を終えることができ、長く保存し必要に応じて利用できるようになった。重要な会見の音声録音は順次、ウェブサイトに新設した「音声アーカイブ」ページにアップしていくが、その第一弾として20人を選び公開した。

佐藤栄作首相、田中角栄首相やフ

オード米大統領、司馬遼太郎ら作家もいる。鄧小平会見は1978年、尖閣諸島の「棚上げ」を語った歴史的名ものだ。ゲストの肉声の証言として活用していた

（専務理事 中井良則）

会見録音の公開始まる
佐藤栄作、鄧小平…肉声で聴く現代史

45周年事業 記念事業

日本記者クラブ創立45周年記念事業の1つである「会見録音のデジタル保存」が終了し、重要な会見録音の公開をウェブサイトで始めた。

音声録音が残っていた。テープが劣化した貴重な資料が消えてしまう前にデジタル化を終えることができ、長く保存し必要に応じて利用できるようになった。重要な会見の音声録音は順次、ウェブサイトに新設した「音声アーカイブ」ページにアップしていくが、その第一弾として20人を選び公開した。

民主党代表選立候補者討論会	3
クラブゲスト	
「2015年経済見通し」柯隆・富士通総研／渡辺博史・国際協力銀行／加藤出・東短リサーチ／フェルドマン・モルガン・スタンレー-MUFG証券	4
見田宗介・東大名誉教授、大澤真幸・元京大教授／榊原定征・経団連会長	5
吉川元偉・国連大使／エスピノス・世界空手連盟会長／ラドスース・国連PKO局長	6
ワルストロム・国連事務総長特別代表(防災担当)／後藤政子・神奈川大名誉教授／ローバック・駐日スウェーデン大使	7
シベリウス生誕150周年記念会見／渡邊啓貴・東京外語大教授／駐日アラブ外交団声明発表 シアム・駐日パレスチナ大使	8
ピケティ・仏経済学者	9
試写会 KANO	9
記者ゼミ ネット時代のマスメディア編	
我孫子 和夫・元AP通信北東アジア総支配人	10
マイBOOKマイPR	
民主党代表選立候補者実施要領メモ	10
ワーキングプレス	11
仏シャルリ・エブド銃撃事件 共同通信社 松村 圭	
佐賀発 保守王国・佐賀の乱	12
争点は農協改革ではない 中央への“憤り”だった	
佐賀新聞社 古賀史生	
被災地通信 栃木県塩谷町	13
指定廃棄物最終処分場の行方 共同通信社 西本晴香	
書いた話書かなかった話	14・15
成長目指す韓国の姿送った“七人の侍”産経初代ソウル支局長のころ	
野美山薫	
リレーエッセー	16
私が会ったジャン＝マリ＝ルベンさん デマゴークは社会の体温計 朝日新聞社 国末憲人	
新年互礼会員懇親会	17
2014年予想アンケート結果発表／表彰式	
寄贈書	18

「イスラム国」人質事件の声明

「イスラム国」による日本人人質事件について発表した声明は次の通り。

◆1月21日
日本記者クラブは、過激派組織「イスラム国」が取材活動中に拘束されたジャーナリストを含む2人の日本人を人質にして、身代金を支払わなければ殺害すると日本政府に要求していることに対し、強く抗議するとともに、人質の無事、かつ即時の解放を求める。

人命を盾にとり金銭を要求する卑劣な行為は、許されない。
日本記者クラブはジャーナリズムと「報道の自由」の発展に努めている。今回の事件は、民主主義の根幹である「報道の自由」を暴力で脅かし、自由な取材活動を阻むものである。
◆2月1日
過激派組織「イスラム国」は湯川

遥菜さんに続き後藤健二さんを殺害したとする映像を公開した。
「イスラム国」のこうした行為を強く非難する。
パリの週刊紙襲撃事件と今回の日本人人質殺害事件で、実行犯グループは、いずれもイスラム教の名の下に犯行を正当化しようとしている。しかし、両事件とも、暴力を使ってジャーナリズムを脅かすテロ行為であり、「報道の自由」を活動の基盤とするジャーナリスト団体である当クラブは、このような凶行を今後とも断じて許すことはできない。

仏週刊紙襲撃事件で抗議 理事長

フランス週刊紙襲撃事件について、伊藤芳明理事長は1月15日の新年互礼会の冒頭、次のように述べ、抗議を表明した。

「パリでわれわれと同じジャーナリストに対するテロ攻撃があり、17人が犠牲になりました。言論機関に対するテロ攻撃にあらためて強く抗議するとともに、亡くなられた方々に深く哀悼の意を表します。同時に、われわれが大事にしてきた表現の自由について、どこまで認められるのか、という非常に重い課題も突きつけられました。これは常に考えていかねばならない問題だと思います」

民主党代表選立候補者討論会(1・8)

実施要領メモは10ページに掲載

●新たな民主党につながる?

岡田氏が、「らしくない」言動に出た。衆議院選挙の前に、細野氏が維新の党との「合併を提案し



野党第1党の再生なるか

討論会前に書いた揮毫を手にもって左から長妻昭、細野豪志、岡田克也の各氏。1月18日の投票の結果、岡田氏が新代表に就任した

てきた。政治家は自分の言葉に責任を持つべきではないか。仕掛けられた細野氏の顔に緊張が走る。天下国家の議論には長けるものの、謀略知略の凶太さには欠ける。そんな印象が強かった民主党の、「らしくない」一場面だった。これが新たな民主党のたくましさやしたたかさにつながるれば、とも思う。

総合司会 日本テレビ

小栗 泉

●再び政権担う日は…

衆議院で100議席にも届かない民主党代表選で、果たして盛り上がるのかと心配していた。しかし本命岡田、対抗細野、そこに大穴長妻の参戦で討論らしくなった。3人の年齢差はほぼ10歳ずつ。最年長の岡田氏の老獪さがにじみ出たが、安全保障観で岡田・細野に

大きな違いがないことに与党経験の重さを感じた。再び政権を担う日はいつか? 民主党自主再建論でたり着けるのか? ひととき、想像の翼を広げた。

第一部司会 NHK 島田敏男

●政権奪取の「覚悟」問う

安倍自民党に代わりうる選択肢の必要性は衆院選でも痛感した。民主党がその存在に復活できるのか。冒頭にあえて次期衆院選の見通しと候補擁立方針を聞いたのは、その覚悟を問うためだった。3候補とも来夏の衆参ダブル選を想定すると答えた。ならば期限は1年半。衆院選では不戦敗に終わった選挙区も多い。自主再建か野党再編か。その戦略も衆院選を見据えたものになるはずだ。誰が次期代表に選ばれても厳しい道だが、奮闘に期待したい。

代表質問 共同通信 川上高志

●アベノミクスへの対応は

「好循環」という名のトリクルダウンを打ち出す自民党。「分厚い中間層復活」の民主党。総選挙を経て経済政策の違いが鮮明になった中で代表選だ。討論会では格差解消、所得再配分機能強化などの主張に大きな差はなかった。安全保障政策をめぐる見解や原発再稼働への姿勢とは好対照。とはいえアベノミクスへの

対応に関するニュアンスの差を突いて議論を進展させることができなかったのは質問者の責任と深く反省。

代表質問 時事通信 軽部謙介

●「地方枠」に感謝

地方をどうやって再生するのか。安倍政権が掲げる「地方創生」とはひと味違う方策を引き出すべく質問団に加えてもらったが、具体性に欠ける回答のまま終えてしまった。公共事業についても建前論にとどまり、反省する次第だ。ただ今回、「地方の視点」という貴重な時間枠を設けてくださった企画委員会の皆さまに感謝。もし次の機会があるならば、質問に磨きをかけて臨みたい。

代表質問 西日本新聞 原田正隆

●暴露に関心、歴史観も

民主党代表選には3人が出馬。世代的にも40代、50代、60代とバランスがとれていて討論にも熱がこもっていた。質問する立場からは、岡田・細野両候補の維新の党をめぐる暴露内容にニュース的な関心が集中したものの、長妻候補をはじめ、戦後70年に関する各候補の歴史観を詳細に聞いたのは、取材する現場の若手記者にとっても大変参考になったのではないか。こうした議論の広がりを党再生に生かせるか注視したい。

代表質問 テレビ朝日 川村晃司



ロバート・フェルドマン

モルガン・スタンレーMU
FG証券マネージングディ
レクターチーフエコノミスト

1・28(水) 司会：大
信田雅二委員／出席：
94人／動画／会見詳録



加藤 出

東短リサーチ
社長

1・26(月) 司会：安
井孝之委員／出席：82
人／動画

2015年 経済見通し

エコノミストが語る 「楽観」と「慎重」



渡辺 博史

国際協力銀行
総裁

1・26(月) 司会：安
井孝之委員／出席：92
人／動画



柯隆

富士通総研
主席研究員

1・19(月) 司会：村田
泰夫委員／出席：102
人／動画／会見詳録

インフレ目標あせるな

加藤

日銀ウオッチャーの加藤出氏は、世評が高い「第1の矢」の異次元の金融緩和にも辛口の評価。量的緩和の景気刺激効果を疑問視し、「円安誘導が本音」とみる。

日銀の大量の国債買い入れは、事実上の直接引き受けで、消費増税先送りのように、財政再建を後退させかねない心配する。「インフレになるぞ」と日銀が言うほど消費者が財布のヒモを締める「悩ましき」も指摘し、「やみくもにインフレ目標の2%を目指さないで、じっくり企業のもうける力を高めながら給料が上がる良い循環の

原油安で2%成長も フェルドマン

2015年の日本経済は――。エコノミスト4人の見立ては「楽観」と「慎重」の間で、かなり幅があった。

今年で13回目と最多登壇のロバート・フェルドマン氏は、最も楽観的。「ようやく円安が効いてきた」と言う。輸出数量が増え始め、訪日外国人観光客は倍増の勢いで、どちらも伸びが続くとみる。

原油安も追い風。1バレル50ドル前後でいけば、他のエネルギー価格への波及もあり年間7〜8兆円、ほぼ消費増税3%相当分の節約になる。効果は大きく15年度の実質経済成長率が「2%を超えてもおかしくない」と強気だ。雇用の改善で賃金も上昇に向かい、日米金利差の拡大で若干の円安、株価も上がると読む。

ただ、アベノミクスの評価は「第2の矢」の財政で社会保障の切り込みが進まず、「第3の矢」も雇用やエネルギーなどで改革が滞り、「正念場の年」と言う。

「SHEEP」な世界に 渡辺

中で、じわり物価が上昇するのが望ましい」と言う。

渡辺博史氏は、世界経済全体を展望し「今年中に底を打ってくればいいなあ、という感じ」。昨年に続き海外メディアの κατοών (漫画) を素材に広範、多岐にわたって解説していただいたが、ここでは羊年(SHEEP)にちなみ、氏が挙げた5つの注目を紹介する。

① S 鈍い (Slow) 賃金上昇 ② H 激化する (Harsher) 地政学的対立 ③ E ユーロ (Euro) 圏の低迷 ④ E 主要中央銀行の金融緩和政策の出口 (Exit) の有無 ⑤ P 石油と天然ガスの値下がり (Price idown)。

「中国リスク」について柯隆氏は、向こう3年ほど公式統計で7%前後の成長(実態は6%程度)が続き、不動産バブルは金融緩和で崩壊が少し遠のいた、とみる。

ただ、李克強首相が旗を振り「輸出・投資依存から消費依存へ」「環境負荷の大きい産業から高度なサービス業へ」の構造転換などを目指す「リノミクス」は「国有企業に邪魔され失敗した」と断言した。

共産党高級幹部、国有企業幹部、民営企業オーナーら人口の3%、4000万人の特権階級が富の大半を独占する一方、人口の6割の農民は市民権が与えられず、社会が不安定化している。中期的には、政治改革を怠ると成長を持続できず「中国リスク」が浮上するとみる。

日本経済新聞出身 土谷 英夫

失敗したりノミクス

柯



見田 宗介 みねた むねすけ
 東京大学名誉教授

大澤 真幸 おおさわ まさちか
 元京都大学教授

1・6 大震災シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」⑩／司会：星浩委員／参加：97人



見田宗介氏(右)は冒頭から、終戦時の体験談を分かりやすく話してくれた。弟子である大澤真幸氏も「初めて聞いた」というエピソードだ。

山形県に疎開していた見田氏が終戦の日を迎えたのは小学校2年生、7歳の時だった。担任の女性教師が「米兵は日本人を串刺しにするかもしれない」と泣き崩れたそうだが、その後、日本は米国の庇護の下で奇跡の復興を成し遂げる。見田氏は「戦前よりも、はるかに明るく楽しい社会になった」と感じた。

安定期の現代世界 かつての成長は望めない

見田氏は、戦後日本の歩みを「現実」の反対語である3つの言葉に表される時期を経たと分析する。民主主義や経済の繁栄は、最初は「理想」と思われていたが、やがて「夢」に変わり、それが「虚構」になっていった。折々の流行歌や映画などを紹介しながら、戦後史を鮮やかに解析してくれた。

大澤氏は日本人の意識調査を分析。70年代後半までは、高度成長に合わせるように「日本人が優れている」という意識が上昇したが、その後、低下傾向が続いた。ところが、90年代後半から再び「優れている」という反応が増え始める。これがナショナリズムの投影ではないか、という。

見田、大澤両氏とも、現代世界は資源などの制約から、かつてのような成長は望めず、安定期に入っていると指摘。にもかかわらず、成長を志向することに無理があると説いた。アベノミクスを進める日本にとって重い示唆である。

1時間半の予定を20分もオーバーしたが、会場から「もっと聞きたかった」という反応が聞かれて、胸をなで下ろした。

企画委員 朝日新聞特別編集委員

星 浩

榊原 定征 さかきばら さだゆき
 経団連会長

1・30(金)昼食会／司会：石川一郎理事
 安井孝之委員／出席：82人／動画



榊原ビジョンが目指すもの 安倍政権との距離感?

「経済と政治は車の両輪」と言われ、どちらがパンクしても走れない。最近の経団連会長(御手洗元会長、米倉前会長)は「政治」との不協和音に苦しんだ。それに比べ榊原会長は政治的には安定な安倍政権がパートナーで幸せである。

しかし、いささか政治との距離感が近すぎないかと心配する向きもある。この日の質疑でも「ズブズブの関係では」と懸念が出た。

会長は、この1月に発表した榊原ビジョン「『豊かで活力ある日本』の再生」を説明したが、その内容は安倍政権の成長戦略と重なり合う部分が多い。経済界独自の政策としてはパンチ力が弱いようにみえた。

独自性と言えば、女性会員から質

問があった女性活躍目標。政府は女性管理職を2020年までに30%へと引き上げる目標を立てているが、榊原ビジョンは30年までに30%と先送り。経済界に一層の努力を求められるテーマには、やや腰が引けているのが気にかかる。

政治家も経済人も、もちろんジャーナリストも小粒になったといわれる時代である。かつて「財界総理」と尊称された経団連会長には首相にも、国の政策にも、あるいは国民に對しても、堂々と言うべきことを言っていない、と願うのは無い物ねだりの部類だろうか。

会見前後に来日中だったトマ・ピケティ(『21世紀の資本』の筆者)は、富める者が富んで、そのおこぼれを多くの国民が受け取るという「トリクルダウン理論」には否定的。安倍政権も経団連もトリクルダウンで日本を成長させるという思惑だが、榊原会長は「(ピケティとは)矛盾はしていない」と真っ向対立を避けた。

望むらくは「立場は異なるが、私たち経済界がしっかり稼ぎ、給料も上げ、皆さんを幸せにします。任せてください」と、どーんと胸をたたいて、言い放ってほしかった。

企画委員 朝日新聞編集委員

安井 孝之

吉川 元偉 国連大使

10月に非常任理事国選
「選挙は最も重要な仕事」

2014・12・16(火)記者会見/司会:中井良則専務理事/
出席:52人/動画



今年、設立70年を迎える国連は、世界唯一の普遍的な国際機関に成長した。数々のノーベル平和賞受賞歴が国連の実績を物語っているが、舞台裏では大國の利害が対立し、激しい外交戦が展開されている。敗戦国として1956年に遅れて国連加盟を果たした日本は、安保理非常任理事国の議席を選挙で勝ち取り、日本人を関係機関のトップなど重要ポストに就けることにより、発言権・影響力の確保に努めてきた。「公選法のようなルールはなく、大使同士、国同士の信頼関係をベースにして戦っている。選挙は国連大使の最も重要な仕事」と語る吉川大使からは、「選挙戦」の苦労がうかがえる。日本が今年10月の非常任理事国選挙で選ばれば、最多11回目の当選となる。

国連でも中国の存在感は高まっている。常任理事国の中で最も多くの平和維持部隊を出しており、世界保健機関(WHO)を含む3つの専門機関の事務局長職を確保するなど、積極的に人材を送り込んでいる。負の側面として吉川大使は、安保理での拒否権について、以前は中国が「核心的利益」と訴える台湾問題に限られていたが、最近ロシアとの協力関係を深め、シリア問題など行使の範囲が広がっていることを挙げた。

時事通信外信部長 岸田 芳樹

アントニオ・エスピノス 世界空手連盟会長

「ネマワシ」上々?

4度目の正直で五輪種目入りなるか

1・8(木)記者会見/司会:土生修一事務局長/通訳:野口弘子/出席:52人/動画

「ネマワシ」は上々といったところだろうか。「空手には、オリンピックスポーツとしての可能性がある」と信じている。言葉の端々に、悲願の五輪種目入りへの手応えを感じさせた。

昨年12月に五輪開催都市に追加種目の提案権が認められて以来、国際競技団体の会長としては一番乗りで東京入り。会見前には下村文科相、舛添東京都知事、東京都議会の高島議長らと会談し、「いずれもポジティブな反応だった」と明かした。



関係者によれば、今回の来日は「最後のダメ押し」なのだという。すでに、昨年6月に菅官房長官を会長とする「空手道推進議員連盟」が発足。自民党の有力議員が名を連ねた。同11月には東京都議会で、空手と野球・ソフトボールの東京五輪での実施を求める決議が全会一致で可決。政治家を中心に、東京五輪関係者との水面下の調整は着々と進んでいる。

「過去3回続けて落選したが、今回はいい方向にいらっていると感じている」。同席した奈藏総久事務総長は余裕の笑みを浮かべていた。従来は弱点だった「政治力」を十全に行使した空手。会見は終始、楽観的な空気が支配していた。

報知新聞運動第2部 塩谷 耕吾

エルベ・ラドスース

国連平和維持活動担当事務次長(PKO局長)

PKOの任務が複雑化
日本には後方支援を期待

1・16(金)記者会見/司会:土生修一事務局長/通訳:澄田美都子/出席:42人/動画

外務省報道官、中国大使などを歴任したフランスの外交官出身で、2011年から現職。



PKOの任務が、停戦監視中心の「伝統型」から、内戦で破壊された統治機構再生援助などへと複雑化している現状を報告した。特に、PKO全体の90%が展開中のアフリカでは、イスラム過激派や麻薬国際組織などの「非国家集団」が治安悪化の元凶になっており、新しい対応が必要だと訴えた。

日本のPKOについては、「これまでの質の高い貢献には感謝している。憲法の制約は承知しており自衛隊を紛争の最前線に派遣してもらおうとは思っていない。エンジニア部隊派遣や本部機能強化への貢献に期待している」と要望した。安倍政権の安保政策には「結果として日本のPKO拡大強化につながるなら私たちの目的にもかなう」とコメントした。

アフリカのマリで、イスラム過激派が青年の両手を切断する場面を目撃したこともあるという。危険な場所での多数の人命にかかわる判断を下すポストだが、柔和な表情を絶やさず、ユーモアも忘れない。「大人の外交官」の円熟味を感じた。

日本記者クラブ事務局長 土生 修一

マルガレータ・ワルストロム

国連事務総長特別代表 防災担当

3月の仙台防災世界会議
原発事故は主題にせず?

1・19(月)記者会見/司会:杉田弘毅委員/通訳:澄田美都子/出席:53人/動画

会見日は阪神・淡路大震災の発生から20年の節目の直後。神戸市での追悼式典にも出席し、「高齢者や家屋を失った人々の生活再建が整っていない。災害の記憶に苦しんでいる人がいまでも多く存在する」と印象を語った。



東日本大震災後、来日は8回を数える。被災地に足を運び、行政関係者や住民らの生の声に耳を傾けてきた。第3回国連防災世界会議が3月、仙台市で開かれる意義について、「被災住民も参加しやす。被災地視察もあり、参加者が復興の状況を自ら確認し、被災者と話をすることは非常に重要だ」と強調した。

東日本大震災は甚大な津波被害とともに世界最悪レベルの原子力災害を招いた。仙台での会議で取りまとめる新たな防災・減災の行動枠組みに福島第一原発事故をどう位置付けるかに関心が集まっているが、「あくまで自然災害の副産物という脈絡で従来と同様、技術ハザードの1つに含める」と、主題にしない考えを示した。いまでも続く放射性物質による汚染や健康不安の現実こそが世界と共有すべき複合災害の経験と教訓ではないか、と考える身としては、やや物足りなさも感じた。

河北新報東京支社編集部 若林 雅人

後藤 政子

神奈川大学名誉教授

米・キューバ関係改善
「少しずつ道は開かれる」

1・20(火)研究会「キューバ」/司会:中井良則専務理事/出席:78人/動画



開口一番「キューバについて はうわさや固定観念が独り歩きしている」とビシヤリ。米国とキューバが関係改善に向かう歴史的な動きの中、勝手に憶測されがちなキューバを事実で知る必要を強調した。

キューバに対する米国の経済制裁は「世界一」厳しく、半世紀以上も続いた。今回、制裁緩和に向けて米国が踏み出したのは、キューバが米国にとって脅威ではなくなり、米国内でも関係改善を要求する声が高まったことにある、と語る。

キューバ革命は理想主義でヒューマニズムに基づく公正な社会を創ろうとした。社会主義だと決めつけると間違っていると指摘する。最大の悩みは生産が上がらないことで、理由の1つが経済制裁だった。ラウル・カストロ国家評議会議長は「経済発展がなければ革命が崩壊する」とまで言った。制裁が緩和されれば、キューバは大いに助かる。

いまのキューバは政治的にも大転換中で、フィデル・カストロも推進者だ。一方、経済の自由化で格差が生まれ、黒人が再び貧困化して人種差別されるなど問題も多い。ゲストブックに「少しずつ道は開かれる」と書いた。

朝日新聞出身 伊藤 千尋

マグヌス・ローバック

駐日スウェーデン大使

ジャーナリスト出身の大使
移民やテロについても「解説」

1・22(木)記者会見/司会:石川洋企画担当部長/通訳:池田薫/出席:32人/動画

「ジャーナリストと外交官には共通する姿勢がある。好奇心です」

そう切り出して場を和ませた。外交官になる前はジャーナリスト経験もある。昨年12月に着任し、早速クラブで会見した。80年代には駐日大使館の報道担当官だったので2回目の東京勤務だ。

パリで週刊紙本社が襲われ、「イスラム国」の日本人拘束が明らかになったばかり。スウェーデンの移民やイスラムについての質問も出た。



「移民反対派にはEU懐疑論の色彩も濃い。フランスやドイツとは表れ方が異なるが、底流にある反イスラムの感情は同じだ」

「テロはいまに始まったことではない。暴力的に表現される少数派の意見ともいえる。最近のテロは宗教を超えたもので、社会から排除される若者や中東の混乱といった背景もある」

論説委員のように解説した。スウェーデンの魅力を聞かれると表情が緩んだ。「美しい首都ストックホルムだけでなく北部にもどうぞ。夏は白夜で真夜中のゴルフを楽しめるし、冬は零下60度のアイスホテルに泊まれる」と大使に戻って宣伝した。

日本記者クラブ専務理事 中井 良則

ハンヌ・リントウ フィンランド放送交響楽団首席指揮者
 新田 ユリ 日本シベリウス協会会長

「シベリウス生誕150周年
 『自然』と融和する音楽に現代性をみる」
 1・23(金)記者会見/司会:小栗泉委員/通訳:宇尾真理子
 /出席:65人/動画



フィンランドの国民的作曲家
 ジャン・シベリウスが今年生誕
 150周年を迎える。チェコの
 ドボルザークのような民族ロマ
 ン主義の国民楽派としても聴け
 るが、そうしたアプローチだけ
 では理解しきれない作品も多
 い。「シベリウスの音楽をもっと
 自然に捉える時が来た。国家主
 義的オーラや取るに足らない神
 話を取り除きたい」とリントウ
 氏(右)は語り、記念公演が続く
 今年、新たな作曲家像が生まれる可能性を示した。

新田氏は日本人とシベリウスの音楽との親和性
 を指摘した。フィンランドもかつて自然崇拜の多
 神教だったことを挙げ、「自然との距離の感覚が
 合う」と言う。渡辺暁雄指揮の日本フィルハーモ
 ニー交響楽団が1962年に世界初のステレオ録
 音で『交響曲全集』を出した史実も挙げた。
 両氏とも「孤高」「シンプル」などの言葉で作品
 を語った。北欧の自然描写ではなく「自然も人間
 も芸術家も一体化(リントウ氏)」、「同じことが2
 度出てこない一筆書き(新田氏)との指摘が興味
 深い。東京都交響楽団員が弦楽合奏曲「アンダン
 テ・フェスティヴォ」を演奏し、その研ぎ澄まし
 された音楽が世界中で愛される理由を伝えていた。

日本経済新聞編集委員 池上 輝彦

渡邊 啓貴 東京外国語大学教授

「多文化社会を意識した新たな基準を」
 1・27(火)研究会「仏週刊紙統撃事件」/司会:榎山幸夫委員
 /出席:69人/動画



予言者ムハンマドを風刺し続
 ける仏政治週刊紙の姿勢と「表
 現の自由」の貫徹を訴えたパリ
 大行進は、世界各地で賛否両論
 を巻き起こした。

日本でも、シャルリ・エブド紙の表紙転載をめ
 ぐる対応は、新聞社ごとに分かれた。黒白つけ難
 いテーマであり、論争は続くだろう。

これについて、仏政治を30年以上も観察してき
 た研究者は、議論に混乱があると指摘した。
 カトリック教会が国や人々の生活を隅々まで支
 配した旧体制を打倒したのがフランス革命。新た
 な体制、つまり国家を守るため、人は公の場で宗
 教的中立を貫く。それは、日本で普通意識される
 政教分離概念を越えた「共和国(つまりは民主主
 義)の成り立ちの大きな原理」なのだと言った。

だから「仏国民は、これを少数派(イスラム教
 徒)いじめとは捉えていないのだ」とも。

フランス人の多くが、共和国のよって立つ原則
 の揺らぎを恐れたのか。「西欧の国民国家の在り
 方、先進国の在り方が問われている」。事件の意
 義を、そう総括した。フランスもそろそろ、「多
 文化社会を意識した新たな基準を作らねばならな
 い」。愛も込めた忠告が、重く響いた。

読売新聞論説委員 林 路郎

ワリード・シーム
 駐日アラブ外交団团长 駐日パレスチナ大使

「テロに強い憤り」
 日本との連携訴え 声明文発表

1・27(火)記者会見/司会:杉田弘毅委員/通訳:アルモ
 メン・アブドラー/出席:98人/動画



「イスラム国」による邦人人質事件を受けて緊
 急に開かれた記者会見。20のアラブ諸国・地域を
 代表して会見したパレスチナのシーム駐日大使
 は、イスラムの名の下に残虐行為を繰り返すテロ
 組織への強い怒りと日本との連帯を何度も強調し
 た。テロを「癌」にたとえ、毅然として戦い、排
 除しなければならぬと訴えた。

では、どう打倒するのか。軍
 事力だけで壊滅できないのは自
 明のこと。取り組むべきは、若
 者が過激な思想に共感する背景
 にある貧困と絶望への対処か。

シーム大使はそのためにも、アラブ諸国の友好国
 である日本には今後も人道支援や経済支援を続け
 てほしいと繰り返した。

一方、メディアに対して不満をあらわにする場
 面もあった。国家ではないテロ集団を「イスラム
 国」と呼び続けることで誤ったイメージが広がっ
 ていると批判し、改めるべきだと注文を付けた。

この会見の5日後、後藤健二さんが殺害される
 映像がネット上に流れた。「イスラム国」は今後
 も邦人の殺りくを続けると宣言している。この現
 実をどう受け止め、どう行動するのか、日本の知
 恵が問われている。

NHK解説委員 津屋 尚



トマ・ピケティ 仏経済学者

1・31(土)著者と語る「21世紀の資本」／
司会：会田弘継(企画委員長) 軽部謙介(委
員)／通訳：長井鞠子／参加：283人／
動画

相次ぐ質問に「私は日本のことを学ぶためにやって来ました。教訓を垂れるためではありません」などと笑いを誘いつつ、疲れも見せずに答える姿が印象的だった。

日本の政策課題は「税制をもっと累進的にして富裕層により多くを負



「不平等是正を」
明快に持論展開
アベノミクス批判も

担させる一方、若者や低所得層には減税策をとること」である、と明快。同時に、「労働市場を改善し、パートなどの労働者や若者の待遇と社会保障を向上させたり、女性に対する不平等な扱いをなくしたりすることで、出生率上昇・人口増加、経済成長につなげる。これが日本の中心課題」と言い切った。

さらに「若い人や女性を利する改革」が日本に必要であるのに、「万

人に対する課税である消費税の引き上げが良いことだと(日本の政治家や官僚などが)考えているのは理解に苦しむ」と、メディアなどにも広まっている消費増税不可避論を真っ向から批判した。

「富と所得の不平等が拡大している日本で、現状は米国よりましだなどと行って、不平等を是正する政策をとらずに模様眺めをしてはいけぬ」とも述べ、国民が政治に圧力をかけて不平等是正への政策努力を強化するよう熱く説いた。

裕福な人がもっと豊かになれば富が貧しい人にしたたり落ちる、という「トリクルダウン」理論については、「これまで失敗だったのに、今後はうまくいくなどとは思えない」と、ぼつさり。世界の主要国は不平等がひどくなかった時代の方が経済成長率は高かったことを挙げ、再分配政策が繁栄の礎だと強調した。

名指しこそしなかったが、こうしたピケティ氏の発言は安倍政権の経済政策に対する批判であると同時に、民主党など一部の野党関係者にも耳の痛い話だろう。拡大する不平等にも有効な手を打たないできた政治はもろろん、経済学者やジャーナリズムへの警鐘でもある。

朝日新聞出身 小此木 潔

愛媛で生年を聞かれ「1969(昭和44)年です」と答えると、「(松山商(松山商高の愛称)が優勝した時やね」との答えがまま返ってくる。夏の甲子園決勝で松山商・井上明、三沢(青森)・太田幸司の両エースが延長18回を無失点で投げ抜き、再試合になったあの年だ。

事ほどさように野球王国・愛媛で松山商の存在は圧倒的だが、31(昭

KANO~1931海の
向こうの甲子園(1・16)



埋もれていた戦前の日台交流
高校野球を通じて描く

和6)年夏の甲子園で準優勝した嘉義農林(台湾)を率いた監督が、松山商初代監督の近藤兵太郎(1888~1966年)だったことを知る人は松山でも多くない。

日本統治時代の1930年前後の台湾を舞台に、ほぼ史実に沿って嘉農準優勝の軌跡を描いた「KANO(1931海の向こうの甲子園)」。猛練習で選手を鍛えた近藤は日本

人、漢民族、先住民族に分け隔てなく接し、運動能力の特性などに応じてチームを編成。地元有力者、メディアからの「日本人でなくても野球ができるのか」などの発言に、「民族と野球に何の関係があるか。この子たちは野球の大好きな球児だ」と一喝する。

台湾では作品に「植民地時代を美化している」との評もあったというが、映画を見れば製作陣の真意は分かる。意図的に歴史を美化するのはなく、近藤が歩んだ事実の持つ力。馬志翔監督(36)は「植民地だから民族や階級の問題はあったが、普段の人同士の付き合いではいいこともあったはず。KANOで描いたのはまさにこういうところだ」「過去から学び、力をもらってほしい」と力を込める。

スクリーンに戻る。「5年以上の野球経験がある素人」が演じた嘉農ナインのプレーは本物。台湾選手の慣れない日本語でのセリフには、自身の野球にかける熱い思いも重なる。エンドロールが終わった時、全力で体を動かしたくなる衝動が湧き上がってくるはずだ。

愛媛新聞東京支社編集部長 山根 健一

新宿バルト9ほか全国上映中 配給：ショウゲート
©果てしなく

29
記者ゼミ



重要なプロ意識 SNS時代でも 伝統的倫理は不変

者がツイートし、けん責処分を受けたという。「何のためにソーシャルメディアを活用しているのかを忘れないことが大切だ」と我孫子氏。ガイド

おとす 和夫
東北通信AP元
人配支総アジア

あびこ
孫子 我

「もはやソーシャルメディアを活用していない米国メディアなどない」。我孫子氏はこう断言し、既存メディアがソーシャルメディアを積極的に活用する米国の現状を紹介した。

その一方で、記者の不用意な発言や行動がメディアの信用を毀損しないよう、各社や業界団体が独自の倫理規範を設けていることも強調する。

米新聞編集者協会(ASNE)が2011年にまとめたガイドラインは、「オンライン上に書いたものは、全て公になると想定せよ」「SNS上で目にしたものは、全て独自に信ぴょう性を確認せよ」「透明性を保ち、誤りを犯したらその場で訂正せよ」など10項目で構成される。その要諦は、「記者としての『プロ意識』を持って行動すること」に尽きるだろう。

ニューヨーク・タイムズでは、課金に関する内部説明会議の内容を記

ラインにも、「第一報はツイッターにはなく、自社ウェブサイトで」とある。本来の目的は、自社サイトの質の高いジャーナリズムへと、トラフィックを導くことなのだから。デジタル技術の進化で、ジャーナリズムを取り巻く環境は激変したが、変わらないものもある。ガイドラインの『い』の一番にある「伝統的倫理綱領はオンライン上の活動にも適用される」。これまで培った報道への信頼を損なわないよう、われわれが長年受け継いできた記者倫理に沿って行動することの大切さを示している。

我孫子氏の話聞き、「メディアに所属する者としての『プロ意識』を常に持ち続けることの重要性を、あらためて強く心に刻んだ。読売新聞メディア局企画開発部

羽布津典子

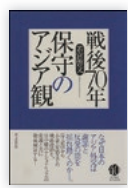
ネット時代のマスメディア編⑫
12・17(水)「ソーシャルメディアと報道倫理」/司会・津山昭英特別企画委員/出席・21人+ネット視聴5人

マイBOOK マイPR

■戦後70年 保守のアジア観

若宮 啓文
(朝日新聞出身)

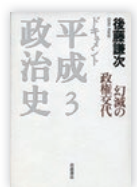
日韓、日中の謎を解く「なるほど、そういうことだったのか」の連続でした」と、好奇心あふれる若者が面白がってくれた。軍事政権下で結ばれた日韓条約に、民主化がもたらした化学変化。日中の国交に抵抗した右派勢力が、尖閣問題をテコに巻き返した執念。歴史教科書問題というポディーブロー。河野談話や村山談話と安倍首相の根深い確執。吉田、石橋、岸から田中、大平、中曽根を経て小泉、安倍まで70年、保守政治のアジア観を総括する。



朝日選書 1944円(税込)

■ドキュメント平成政治史3 幻滅の政権交代
後藤 謙次
(共同通信客員論説委員)

語り部」としてまとめた政治史 政治記者の道を歩み始めたのはいまから33年前。右も左も分らない新米記者に社の垣根を越えた先輩記者は実に多くのことを教えてくれた。政変の背景、政治家同士の人間模様。誰もが一流の語り部だった。そこで学んだことが日々の政治取材にどれほど役立ったことか。その恩はいまも忘れることがない。「そろそろ自分も語り部の側に回る年齢を迎えたのではないか。そんな思いも込めて書き上げたのが『平成政治史』全3巻である。一応、2012年12月の第2次安倍晋三内閣発足までを一区切りとしたが、機会があれば続編に挑戦したいと考えている。



岩波書店 3024円(税込)

民主党代表選討論会 実施要領メモ

▼日時 1月8日(木)13:00~14:45(告示1月7日)▼長妻昭元厚生労働相、細野豪志元幹事長、岡田克也代表代行の各候補(届け出順)▼会場10階ホール▼進行 第1部(40分)各候補の基本的主張(持ち時間3分)の後、候補者同士の討論。候補者が相手指名して質問、それに答える形式(持ち時間各1分)。第2部(65分) 〃

会場から寄せられた質問を参考に企画委員会の代表が質問。回答時間は各1分▼総合司会・小栗泉、第1部司会・島田敏男、代表質問者・川上高志、軽部謙介、原田正隆、川村晃司の各企画委員▼出席者 計203人。ENGはニュース映画協会代表テレビ東京のほか国内13社、外通1社。民放ラジオは国会放送記者会から3社。カメラは中継や党も含めテレビカメラ14、スチル12の計26台。

仏シャルリ銃撃 連続テロ

松村 圭(共同通信パリ支局)

新たな現実直面するフランス 疑問、重苦しさ…展開読めず

踏みとどまろうと踏ん張った足場がズボツと抜け、また一段、恐怖の闇に引きずり込まれる。フランスの風刺週刊紙シャルリ・エブドの銃撃に始まり、合計17人が犠牲になった連続テロの取材で味わったのは、そんな感覚だった。

事件発生は現地時間1月7日の午前11時半ごろ。「アラール・アクバル(神は偉大なり)」と叫んだ2容疑者による言論機関を狙ったテロで12人が死亡。大ニュースだ。すぐに近隣2支局から応援要員を手配した。ただ、容疑者は間もなく特定され、夜には「パリ北東約130キロのランスの関係者アパートで特殊部隊が作戦を実施中」とフランスメディアが報道。「射殺か逮捕か。今夜中に決着」。そんな雰囲気だった。

ところが、数時間後にアパートは空と判明。「捜査当局は容疑者を追尾できているだろうか」。疑問とともに嫌な空気が広がり始めた。翌朝、パリ南郊で女性警官が撃た

れる事件が発生(のち死亡)。当局は「週刊紙銃撃とは無関係」と発表した。何かひっかかる。が、折から2容疑者がパリ北東エヌ県で目撃されたとの情報が。追うべきはこちらだ。捜査当局は広域包囲を徐々に狭めているという。「日暮れまでには捕えるだろう」。期待というより後の記事展開を考えると、そう見通しを立てた。しかし、容疑者は見つからなかった。重苦しさが募った。

9日朝、事態が動いた。2容疑者がパリ北東の印刷会社に立てこもった。人質もいるという。ここは記者として「よし」と気合を入れた。車を手配し、記者、カメラマンを急派。「銃撃戦で容疑者射殺。人質、警官にも死者。これが最悪のラインか」。さまざまな原稿のパターンをシミュレーションしつつ事態を見守った。

しかし、テロの本番はここからだった。印刷会社の立てこもりから数時間後の午後1時ごろ、パリ東部のユダヤ系食料品店で別の立てこもり

事件が発生。人質もいるという。こちらは現場が町中だったため、特殊部隊員らが結集し店を包囲する物々しい映像が生中継された。「2つの事件の関連は」当局は2正面作戦にどう対処するのか。さまざまな疑問が浮かぶが、答えはない。「いったいフランスで、いま何が起きているか」。一瞬、背筋が寒くなるのを感じた。

緊迫した状態の中、食料品店の立てこもり犯は前日の女性警官銃撃の容疑者であることが分かり、「印刷会社の2容疑者に手を出せば人質を殺す」と当局を脅していることが判明。容疑者は最初から連続テロを計画し、連携をとって動いていたとい



銃撃事件後、最初のシャルリ・エブド発売日となった1月14日、暗いうちからパリ市民がキオスクに列を作った(シャンゼリゼ通り/共同通信社提供)

うのだ。

午後5時ごろ特殊部隊が2カ所ほぼ同時に突撃作戦を敢行。3容疑者は射殺された。しかし、フランス人は昨日までとは違う世界に放り出された。過激思想はすぐそこまで入り込み、いつテロが起ころうともおかしくない。これが新しい現実だ。いや、うすうす感じていたが、意識的に見ないようにしていただけだったかもしれない。

巨大な国民感情どこへ

「それでもテロには屈しない」。決意は圧倒的だった。11日、パリで160万人、全土で370万人がデモ。政府は情報機関強化など、具体策を打ち出した。しかし、この巨大な国民感情はどこに向かうのだろうか。「多様性は認める。が、国家の非宗教性、言論の自由といったフランス共和国の根本価値については妥協しない」

これはこれで、また1つの原理主義だ。フランス社会の在り方や居心地が変わるのだろうか。「連続テロ後のフランス」の形はまだ見えていない。

まつむら・けい▼1992年入社 大分支局 運動部 中国総局などを経て 2012年から2度目のパリ勤務

保守王国・佐賀の乱 争点は農協改革ではない 中央への“憤り”だった

古賀 史生
(佐賀新聞東京支社)



「佐賀のことは佐賀で決める」。佐賀県知事に当選した山口祥義氏(49)は花束を抱えて叫んだ。知名度ゼロの候補者が、改革派として全国的にも知られ、自公両党の推薦を受けた前武雄市長を破り、「中央対地方」の争いを制した象徴的なシーンだった。

■ 異例ずくめの県知事選

前職の古川康氏の国政転出に伴って急ぎよ行われた知事選は、告示から正月をはさんで投開票という「年またぎ」、しかも保守王国・佐賀を舞台にした12年ぶりの保守分裂と、異例ずくめの展開だった。

官邸主導で決まった与党候補の前



選挙が確定となり、壇上で支持者に手を振る山口氏＝佐賀市多布支援助者らに運営事務所(撮影・山田宏一郎/佐賀新聞社提供)

ら自民党の動きは異例だった。樋渡氏は、T S U T A Y A に運営

■ 民意無視した電話作戦に不快感

振り返れば、候補者選別の段階から自民党の動きは異例だった。樋渡氏は、T S U T A Y A に運営

武雄市長・樋渡啓祐氏(45)に対して、農政協議会が山口氏を支援する構図から、メディアでは「官邸対農協」の構図で報じられることも多かった。それも確かに1つの切り口ではあるが、東京支社から応援要員として行った取材現場では、違和感がつきまとった。佐賀が農業県とはいえ、農協改革が争点に上がったわけではなかったからだ。

を任せた図書館改革や、市民病院の民間移譲などの行政手腕と、インターネットを駆使した発信力とで注目を集めた。その一方、摩擦を恐れぬ政治手法や、時折飛び出す過激な言動で反発も強かった。

樋渡氏が出馬に意欲を示した11月下旬、反樋渡派の首長や県議らが別の官僚を担ぎ出す動きがあった。が、強い圧力でこの官僚は出馬を断念。さらに、その中心にいた今村雅弘衆院議員が、党本部からあからさまな仕打ちを受ける。衆院選で小選挙区から比例へ転出するのに伴い、名簿順位の優遇が約束されていたにもかかわらず、ふたを開けてみれば当選ラインぎりぎりの31位だった。

土壇場で立候補を決めた山口氏は自民党県連に推薦願を出す、県連は申し込み期限が過ぎていることを理由に受理せず。結局、地元の意向を無視する形で党本部が樋渡氏推薦を決めた。

今村氏の処遇、候補者つぶし、樋渡氏の推薦。いずれも中央主導で進み、選挙戦でも国政選挙並みの大物が次々に佐賀入りした。

極め付きは県内の家庭に無作為にかけられた安倍晋三首相からの電話作戦。受話器を取ると樋渡氏への投票を呼びかける首相の録音メッセージ

一口メモ

- 佐賀県知事選挙 古川康前知事の辞職に伴い、新人4人が立候補し、2015年1月11日に投開票された。
- 元総務省過疎対策室長の山口祥義氏が18万2795票を獲得し、自民、公明の推薦を受けた前武雄市長の樋渡啓祐氏を3万9千票差で破った。投票率は54.61%で、過去最低を更新した。

こが・ふみお▼1995年入社 論説委員などを経て 2013年から東京支社記者兼論説委員

ジが自動的に流れたが、なりふり構わぬ介入に不快感を持った県民もいた。

佐賀県には国策にかかわる課題がめじろ押しだ。新型輸送機オスプレイの佐賀空港への配備計画をはじめ、九州電力玄海原発の再稼働、国営諫早湾干拓事業(長崎県)の開門調査問題などだ。国の意に沿う知事を据えたいという思惑が透けて見える。

「中央対地方」の構図では、原発再稼働が争点になった滋賀県知事選、普天間基地移設の沖縄県知事選に続いて、安倍政権にとっては手痛い3連敗となった。

今回の選挙は明治維新期になぞらえて「佐賀の乱」と呼ばれることが多かったが、もはや単に地方の「乱」ではない。地方の民意にどう向き合うか、政権の姿勢が問われる。

被災地通信⑥ 栃木県 塩谷町

指定廃棄物最終処分場の行方 町を挙げての「断固反対」 問われる環境省の対応

西本 晴香 (共同通信宇都宮支局)

支局のある宇都宮市から北へと車を走らせ、塩谷町との境を越え、田んぼに並ぶ手書きの看板がいくつも目に入る。「最終処分場いんね(いらない)」「きれいな自然を汚すな」。中心部に近づくにつれ、その数は増え、役場にも「最終処分場断固反対」の上り旗がはためく。

昨年7月末、栃木県塩谷町は、東京電力福島第一原発事故で発生した指定廃棄物の最終処分場候補地に選ばれた。町では直後から官民を挙げた反対運動が起こり、詳細調査に向

けた住民説明会を開きたい環境省との間で、こう着状態が続いている。

指定廃棄物とは、放射性セシウムの濃度が1キログラム当たり8千ベクレルを超えるごみの焼却灰や、下水汚泥、稲わらなどで、原発事故で出た放射性物質が付着して12都県で計約15万7千トン(昨年末時点)が発生した。宮城、茨城、栃木、群馬、千葉の5県では、国が1カ所ずつ処分場を新設することになっており、栃木県では現在、約1万4千トンが農家や事業所の敷地など、約170カ所で仮置きされている。

■名水への影響懸念
対立は深まるばかり

塩谷町では、7月30日の「初日」



「反対」の紙を掲げる町民ら／2014年7月30日／塩谷町役場(共同通信社提供)

から反発が起こった。同町上寺島(かみでらしま)の国有林が選定されたことを伝えるため、役場を訪れた井上信治環境副大臣(当時)に対し、詰めかけた住民100人以上が「絶対反対」「塩谷を守れ」と声を上げた。見形和久町長も「明確に反対する」と述べ、説明会の受け入れを拒否している。

町が反対の理由に挙げたのが、候補地から約4キロの距離にあり、名水百選にも選ばれている「尚仁沢湧水」。県外からも多くの人が水をくみに訪れる町有数の観光地で、風評被害を懸念する声が強強い。

候補地は、舗装されていない山道を車で20分ほど進んだ林の中にある。取材で入ったのは夏だったが、生い茂る木々が太陽の光を遮って涼しかった。落ち葉や木の枝が重なる斜面を少し下ると、すぐそばには沢が流れ、もし放射性物質が流れ出れば、近くの川や地下水脈を経由して下流域にも影響が出る、と心配する町の思いも十分理解できる。

その後、町では住民が反対同盟会を結成し、候補地の白紙撤回を求め署名を、町人口の14倍に当たる約17万人分集めて国に提出した。

また、町議会も白紙撤回を求める意見書を可決したり、候補地周辺の事業を町の許可制にする独自の保

全条例を制定するなど、町を挙げての反対運動が続いた。

■町長から「福島集約論」も
こう着状態どう解消するのか

一方、見形町長は11月、県内首長に宛てた文書の中で、栃木を含む5県の指定廃棄物を福島原発周辺へ集約すべきだと訴えた。12月の衆院選栃木2区では、同じく「福島集約論」を主張した候補者が現職大臣を破って当選。選挙区全体では199票差の大接戦だったが、塩谷町では約66%の得票を占めた。

塩谷町の「民意」は明らかだが、一方で、台風や竜巻などで飛散する危険性がある仮置きをそのまま続けてよいはずはない。環境省はこの半年間、さまざまな場で「地元の理解を得られるよう丁寧説明していく」と繰り返し返してきたが、解決の糸口は見いだせていない。

処分場建設予定の5県の中で、栃木は宮城に続いて作業が先行しており、塩谷町の動向は他県にも影響を与える可能性がある。ひいては、国全体の指定廃棄物政策を占うことにもなるだろう。

にしもと・はるか▼2011年入社
阪支社社会部 松江支局を経て 2014年5月から宇都宮支局

国交正常化前

成長目指す韓国の姿送った 七人の侍 産経 初代ソウル支局長のころ

野美山 薫



のみやま・かおる

1929年生まれ 53年産経新聞入社 大阪社会部 ソウル支局長 政治部次長 世論調査室長 弘報部長 編集委員 社団法人日本通信販売協会事務局長 同専務理事を17年務める

韓国では、李承晩大統領が1960年4月19日の学生革命によって退陣したあと、尹潽善大統領、張勉首相の政権が成立した。しかし1年足らずで起こった少壮軍人のクーデターにより、61年5月16日、張勉内閣は解体された。私は62年5月、産経新聞の初代ソウル支局長として、大阪社会部から韓国に初めて足を踏み入れた。

そのころ、日本と韓国の間には国交はなく、日本の新聞記者は在韓米軍の従軍記者として入国し、米第8軍のPLO(プレス・リエゾン・オフィス)からIDカードをもらい、ソウルの外人記者クラブのメンバーになった。

ソウルには全国紙4社と通信社2社、NHKが常駐することになったが、読売新聞以外は支庁前の一等地

にある半島ホテルの7、8階の部屋にそれぞれ支局をおき、住居と事務所を兼ねていた。産経の隣室は張勉首相の住居になっていたスイートルームで、内外の要人の宿泊に使われており、取材には便利だった。

読売の記者はソウルの龍山中学校の出身。そこは韓国人の学生が多く、軍事政権の若い将校たちに同級生がいっぱいいた。夫人と息子たちと、外人住宅に住んでおり、夜は昔の仲間が集まって、酒盛りもしばしば。社会部出身のよしみで、時折私を招いてくれた。韓国の青年将校たちは、日本の明治維新や二・二六事件のことをよく知っており、「同期の桜」や「昭和維新の歌」を合唱したこともあった。

産経の外信部からは、これまで柴田穂記者が何度かソウルに来てお

り、その時の人脈を引き継ぐことができた。

赴任した日にホテルに来てくれた東亜日報社会部のR記者は、その日が梨花女子大の5月祭だから見た方がいいと、案内に婦人記者をつけてくれた。

夜はサツマワりの車に乗せてくれ、社会部の取材ぶりを見学。部会コンパにも呼んでくれた。部長が「安重根を知っているか」と聞いてきたが、一応のことは調べていたので、テストには無事合格したようだ。



役所の取材などは英語だけだったが、夜の飲み会になると、みんな日本語がうまいのに驚いた。英語の力を付けるために、ホテルの近くに住む医師夫妻と、米国に留学が決まっ

ていた女性と一緒に、米人を囲んでの勉強会に入れてもらい、韓国のこともいろいろ教えてもらった。

外人記者クラブでは、毎月1回の板門店での米軍と北朝鮮との会談を取材に出かけた。板門店には米軍の電話があり、受話器を取ると横田基地が出て、日本のどこへでもつないでくれる。本社との込み入った話などは、この電話をよく使ったものだ。前線での演習にも同行したが、兵士の昼食の弁当にはステーキやアイスクリームまでついている。案内の将校は「兵隊にはこのくらい食べさせないと、戦争はできませんよ」ということだった。

従軍記者は外人用の売店も利用でき、毎月スピリッツ3本、ワイン6本やコーヒーなどを格安で買うことができる。そのころの韓国には、こ

うした洋酒類はないし、コーヒーもなかった。私は酒をたしなまないで、支局の来客用に役立てた。日本の新聞や雑誌もあるので、連日のように来客があり、ニュースを手土産に、日本の経済や政治について聞かれることも多かった。

軍事政権でも外人記者を観光地の慶州に招待し、首相、外相も一緒に、パーティーでは自由に話ができた。政権を担う最高会議の朴正熙議長の内記者会見では、日本人記者も英語で質問できた。

青年将校たちは、初心では国をよくしようという意気込みがあり、暴力団を厳しく取り締まったり、経済にも力を入れていた。親しかった韓国の記者の何人かは、政権に入っていた。

◆ 新聞記者は足で書けと仕込まれてきたので、現場に走る。ソウル大学での学生の騒ぎでは、学生たちの隊列のなかにいた。警官隊が出てきて、一斉に銃口を向けてきた。「怖くないのか」と横の学生に聞いたら、「鉄砲が怖くて革命はやれませんか」と平然としている。

米軍の演習にヘリや小型機で同行する機会も多かったが、前夜、必ず

書類にサインを求められた。「どんなことがあっても賠償を求めません」と書かれたものだが、その時はそれとなく家に手紙を書いた。

ホテルに近い南大門市場には、毎日のように出かけて、米価をチェックし、量も確かめた。韓国の新聞は食糧危機でいまにも政権が倒れるかのように書いていたが、時系列で見ると、かなりよくなっている。本社からは、「他紙に比べると、突っ込みが浅いのではないか」と言われたが、「大丈夫と書くには自信がない」と書けない」と反論したのを覚えている。

産経は政権の中枢にニュースソースがあり、重要な会議があった時は、軍のジープがホテルに迎えに来た。帰日もジープだったが、夜間通行禁止で一般人は深夜の市中を動けなかったからだ。

◆ 隣のスイートルームのお客では、韓国の国歌を作曲した安益泰氏とよく話をした。東京音楽学校に学んだ同氏は、配属将校に勧められたそうだが、仲間の日本人学生たちがいつもかばってくれたという。ソウルでの新聞の死亡広告には、日本時代の学校の同窓会が名前を連ねていたし、スポーツの交流で日本の学生チームが来ると、ソウルの先輩たちが

面倒を見てくれたということだ。ハンドボールで女子高生のチームが来た時に、団長が永野重雄氏だったので会いに行った。場末の小さな宿屋で、学生たちと一緒に泊まっていた永野氏を見て、この人はなかなかの人だと思った。

◆ 財界の視察団もいくつかみえたが、お歴々が秘書を連れてくることも許されず、団長もスイートルームに一人ぼっち。隣室のよしみで、いろいろ相談に乗ることもあった。川崎重工の砂野仁社長は、出入りの時に私の部屋に来て「新聞記者は身体を粗末にしている。真向法を教えよう」と言われる。毎朝5時すぎに部屋をノックされ、教えを受けたあと、散歩に付き合った。

◆ 国交がないので、日本の外務省も常駐者はおけず、時々数週間滞在としかたかただった。ソウルにいる日本人は、私たちのほか、商社が数人、東京銀行1人くらい。キューバ危機の時は在韓米軍も戦闘配置につき、もし戦争が始まったらどうするか、記者仲間が集まって協議した。結局、ホテルの向かいのアメリカ大使館に駆け込むことにした。

韓国の情報は、東京でも限られて

いたようで、私たちは七人の侍として注目されていたらしい。大平正芳外相から「ご苦労さん」ということで、炊飯器が贈られてきた。ソウルの米はとてもおいしく、仲間を飯を炊くこともあった。

◆ すでに李承晩大統領の時代から、韓国の教科書では、日本についての厳しい記述が多く掲載されていた。しかし、実際に日本人に会うことはほとんどなかった。私なども街で道を聞かれたり、時間を聞かれることもしばしばだった。1年半の在任中に、慰安婦問題や竹島問題などで不愉快な思いをすることは、まったくなかった。

◆ 朴議長も、日本人の教師から「前は頭が良いから、金のかからない軍の学校に行け」とすすめられたという。金鐘泌中央情報部長も、授業料不要の師範学校で学んでいる。ソウル大学のR教授も旧制高校時代に教師から「独立を目指すなら経済を勉強しろよ」と言われたそうだ。

◆ 韓国のこの世代の人たちは、きちんと現実を踏まえ、なによりも成長を目指していたことがわかる。当時の支局に出入りする韓国の人たちからは、そうした印象を受けた。

私が会った
あの人

仏右翼「国民戦線」前党首・

ジャン＝マリイ・ルペンさん

デマゴグは社会の体温計

国末 憲人（朝日新聞社）

何せ、移民排斥や反ユダヤの発言で悪名をとどろかせた人物である。本欄で紹介するのは、大いに気が引ける。同時に、次に何をすべきか、目が離せない人でもあるのが、フランスの右翼政党「国民戦線」前党首のジャン＝マリイ・ルペン氏（86）だ。

彼には「極右」「ファシスト」との非難がつきまとう。なのにあえて取材を続けてきたのは、彼を通じてフランス社会の病理が透けて見えると思うからだ。世の中がいかに不健全かを指し示す体温計的な存在なのである。

ルペン氏をちよつとだけ弁護すると、彼は差別主義者でデマゴグだが、ファシストやネオナチではない。右翼の潮流から暴力路線を排除し、議会主義を定着させた「功労者」だと位置付けられる。

学生時代から右翼活動に走り、1972年に「国民戦線」を設立。以後、38年余りにわたり党首を務めた。2002年には大統領選の決選に勝ち残った。

その決選前、インタビューを通じて、彼と身近に接した。

「大量の移民のせいで、無秩序が社会を支配し始めている」

「欧州連合（EU）内のフランスの地位は、米国内のオクラホマ州程度。EUから早く抜け出せ」

言いたい放題。一方で、強面イメージの割には礼儀正しく、人当たりもいいのは意外だった。

以後、彼の記者会見に頻繁に顔を出し、集会で演説も聴いた。その弁舌は、もはや芸術の域に達している。敵を明確に定め、あらゆる表現を駆使して罵倒する。原則論と具体例を巧みに使い分け、思わぬ比喩で聴衆

を驚かせる。

天性の雄弁家か。いや、世間から相手にされない中で関心を集めようと、話術を磨いたからに違いない。彼は百の詩をそらんじる。

2007年の大統領選前、帰郷した彼に同行して、仏西部ブルターニュ地方の漁村を訪れたことがある。実家は、長屋の一室だった。「水道も電気もなかったんだ」と、極貧の少年時代を振り返る。エリートぞろの仏政治家の中で、彼は珍しく、庶民の出だ。14歳の時に漁師の父を事故で失い、以後の苦学の経験が、現在までの活力につながっている。

もっとも、皮肉っぽく挑発に満ちた彼の言動には、どこかしら「道化師」の薫りも漂っていた。彼は、右翼が大統領になれないと、とつくに



ステーキにご満悦のルペンさん 欧州議員食堂で（筆者提供）

悟っていたのではないだろうか。

2013年秋、仏ストラスブールの欧州議会で久々に彼と会い、議員食堂で昼食を共にした。食欲は相変わらずだ。山盛りのステーキを平らげ、コココーラを注文して「べれたら、何を言われるかわからないなあ」と笑いながら飲み干した。反グローバル化を旗印とする右翼は、コーラなど飲んではいけないはずなのに。

一方で、さすがに衰えぶりも否めない。やや疲れた表情で、周囲の会話にうんうんとうなずくばかり。2011年に党首の座を三女のマリヌさんに引き継いで、急に老け込んだのかもしれない。

マリヌさんは、父よりも冷徹、戦略的で、政権を手しようとする気で画策している。1月にパリで起きた連続テロの際にも、反イスラムの主張を前面に掲げ、支持拡大を狙った。

この政党、この一家からは、まだまだ目が離せそうにない。

（くにすえ・のりと 論説委員）

次号は江種則貴さん（中国新聞）にバトンが渡ります。

2014年(第42回)予想アンケート結果(2014年1月17日実施 応募総数 470)平均6.4点

	正解	正解率
①12月31日現在のわが国の首相は誰か	(安倍晋三)	93.2%
②12月31日現在の東京都知事は誰か	(舛添要一)	54.0%
③年内に安倍首相は靖国神社に再び参拝	(しない)	74.9%
④年内に日中首脳会談が(国際会議出席の際の立ち話は除く)	(行われる)	23.2%
⑤日経平均株価が瞬間風速で2万円を超えることが	(ない)	73.6%
⑥消費税を予定通り2015年10月に8%から10%に引き上げることが年末までに閣議決定	(されない)	52.6%
⑦11月の米中間選挙で民主党が下院の過半数を奪還	(しない)	73.6%
⑧日本人がノーベル賞を受賞(ジャンルを問わず)	(する)	62.8%
⑨ソチ五輪フィギュア女子シングルで浅田真央選手が金メダルを	(とらない)	64.0%
⑩ブラジルW杯で日本代表がベスト8に	(入らない)	71.7%



喜びの弁

- 最高得点(全問正解)の皆さん(写真左から)
粕谷賢之会員(日本テレビ執行役員解説委員長・クラブ理事)…2年連続2回目
「昨今は社内でも世の中でも褒められることはほとんどないので、大変うれしいです。3連覇を目指して頑張ります」
- 中山暁広会員(四国新聞東京支社編集部長)
「宝くじに当たったような感覚を覚えています。いずれ地元に戻りますが、なにより思い出になりました」
- 西澤豊会員(時事通信代表取締役社長)
「今年の問題に『日韓首脳会談はあるか』がありませんが、ソウル特派員の経験者としては、ぜひ知恵を出して日韓正常化に努めていただきたいと思っています」
- 野津修敬会員(産経新聞・日本美術協会「世界文化賞」事務局長)
「元上司の羽佐間重彰さんがちょうど30年前に全問正解。会報に『下タカンが冴えてたなあ』と書いておられて、私も、それを引き継ぐことができ感慨深く思います」
- 中尾雅彦会員(関西テレビ報道番組部長)*懇親会は所用で欠席
「日中首脳会談、消費税増税見送りと私の回答通りに動いてくれた現政権にとりわけ感謝します」

新年互礼会員懇親会が1月15日午後6時から、10階ホールで開催された。昨年の会見ゲストや大使館関係



着任したばかりのローバック・スウェーデン大使と懇談する伊藤理事長(毎日)

予想アンケート9年ぶりに満点 5人が快挙

者、法人賛助会員、関係なども招き、計199人が参加した。伊藤理事長のあいさつと乾杯の音



「ん～難問もあったのに5人が満点とは」——会場内に掲示された昨年の予想アンケート結果を見る山下共産党書記局長、小田理事(読売)、下村文科相(左から)

頭で開会した後、これまでクラブで3回会見を行っている下村博文・文部科学相があいさつした。予想アンケートは5会員が9年ぶりの全問正解を達成。会田弘継企画委員長から表彰状と副賞(万年筆)を受け取った。さて、今年10問の行方は——?



(左から)ウーテン駐HEU代表部広報参事官、軽部企画委員(時事)、小関同代表部報道室長、脇企画委員(日経)

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■第8回ブロードバンド特別シンポジウム

「どうなる？ どうする？ 2020年に向けた映像サービス」をテーマにしたシンポジウム。桑原知久氏(NHK編成局編成主幹)による「テレビに視聴者を取り戻せるか～NHK ハイブリッドキャストと放送法改正が目指すこと～」などの講演のほか、関口和一氏(日本経済新聞論説委員兼編集委員)の司会でパネルディスカッションが行われた。NPO法人ブロードバンド・アソシエーションなどが開催した。(1.13 10階ホール)

■千代田プレスクラブ

毎日新聞論説室専門編集委員の倉重篤郎記者をゲストに、定例会合と懇親会を行った。(1.16 大会議室)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらが政治家を招き、定期的に勉強会を行っている。1月は佐藤勉自民党国対委員長をゲストに招いた。(1.21 大会議室)

■民放解説研究会 賀詞交歓会

民放各社の解説委員、キャスター、政治部記者らが集まり懇談した。ニュースソース側から、甘利明経済再生担当相、石破茂地方創生担当相、岡田克也民主党代表などが出席した。参加者は約100人。(1.27 宴会場)

■ドキュメンタリー映画「袴田巖」プロジェクト 製作発表記者会見

昨年3月に再審が決定した袴田事件をテーマにしたドキュメンタリー映画の製作発表が行われた。袴田巖さん、姉の秀子さん、周防正行氏、輪島功一氏らが集まった。当日は陣内直行プロデューサー、金聖雄監督のあいさつのほか、ダイジェスト版の上映も行われた。映画は今年秋に完成、冬に公開予定。(1.30 宴会場)

「寄贈書」

■偽りの薬 バルサルタン 臨床試験疑惑を追う

「大ヒット薬の宣伝に使われた臨床試験に不正があった可能性がある」。こんな情報をきっかけに取材は始まった。問題の臨床試験は、慈恵医大、京都府立医大、千葉大など名だたる大学で実施され、いずれも学術誌に発表されて医学的な評価が定まっていた。

1年後、記者たちは臨床試験に製薬会社員が身分を伏せて参加していたことや、製薬会社から億単位の「寄付金」が研究チーム側に渡っていたことを突き止める。毎日新聞の告発記事をきっかけに、大学、学会、官邸、厚生労働省が動き出し、データ操作されていた事実が次々に明るみになっていく。そして東京地検特捜部が重い腰を上げた――。

半ば公知の事実でありながら、大きな批判にさらされてこなかった製薬企業と医師たちの癒着構造に調査報道で切り込み、風穴を開けた2年半に及ぶ取材の一部始終をまとめた。

渡辺 暖 毎日新聞科学環境部



毎日新聞社 1512円(税込)

新しいOB会員

■六車 護



1970年毎日新聞入社。運動部長、論説委員、紙面審査員などを務め2005年退社。現在、警備保障タイムズ代表取締役。

極めて健康。「施設利用」が主目的になりそう?! 折を見て、記者会見などにも顔を出そうかと……。その節はよろしく。

シベリウス生誕150周年記念会見 演奏会 (1.23)

クラシック生演奏付きの会合をクラブが主催するのは初めてだった。東京都交響楽団から、じゅうたん敷きの会場で、厚地の緞帳の前で演奏すると音が吸収されてしまう、と事前に指摘があった。



(8ページに「クラブゲスト」)

そこで、会場端の大理石の壁を背に演奏してもらうことになった。そのためか、チェロの低い、重い音まではっきりと聞こえた。演奏後、楽団関係者が「コンサートホールのような音が出ましたね」と参加者の気持ちを代弁してくれた。(石川洋)

クラブウェブサイト コンテンツ・機能を充実

すでにご案内のように、会報を創刊号(1970年3月号)からすべて公開しました。トップページ上段の「活動」から「会報」を選択、読みたい年月の「PDF」のマークをクリックすれば表示されます。

新しく作成した「音声アーカイブ」へは、「活動」から「音声アーカイブ」を選択してください。クラブ創立以来の重要会見の音声聞くことができます。(2ページに関連記事)

サイトの構成を変更して「サイトマップ」も追加しました。「会見レポート」「会報」「会見詳録」など総合的に検索したい場合は、トップページ右上の「検索ボックス」をご利用ください。トップページ上段「活動」の「会見検索」からは、ゲスト名や国名、研究会名などで検索することができます。

■会議報告

●第359回会報委員会 (1.9 小会議室)

2月号の編集と3月号掲載の「3.11から4年」地下鉄サリン事件から20年」特集について協議した。出席 石川委員長、高橋、五十嵐、神田、風間、大寺、荒田、北村、長澤の各委員。

●第448回企画委員会 (1.15 宴会場)

総会記念講演講師や今後のゲスト候補を検討したほか、記者研修会、海外取材団派遣などについて協議した。

出席 会田委員長、星、安井、服部、坂東、橋本、勝股、脇、別府、宮田、川上、瀬口、原田、宮内、島田、竹田、川戸、杉尾、村田、津山の各委員。

●第449回会員資格委員会 (1.15 大会議室)

2月1日付入会を審議し、理事会に答申した。出席 小田委員長、中島、斎藤、船木、播磨、玉置、山本、國府、青木の各委員。

●第215回施設運営委員会 (1.22 大会議室)

11、12月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について事務局が報告した。出席 粕谷委員長、歌川、清水、吉澤、五十畑の各委員。

レストラン *価格はすべて税込です

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766

和食 如月懐石 (2/27まで)

先付：ふぐ煮ごごり、帆立貝酢の物ほか お椀：清汁仕立て 刺身：三点盛り 焼物：蟹甲羅焼き 煮物：鶏治部煮 揚げ物：子持昆布と筍の挟み揚げ、たららの芽ほか 食事：蟹雑炊 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 鹿背肉のソテーコース (2/28まで)

ズワイ蟹のカクテルとカリフラワーのムース、オリーブ風味のコンソメ 小松菜・春雨入り、鹿背肉のソテー 芳醇な赤ワインソース、トスサラダ、アップルパイ、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー (土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。

(シェフ：黒須修一)

国産牛ロース肉のすき焼き鍋をどうぞ

冬の鍋シリーズ第3弾です。2月27日(金)まで、夜の9階レストランでお楽しみいただけます。お一人2,800円で、お二人からお受けします。ご利用の際は予約(3503-2723)をお願いします。

会員社ホール | イベント | 情報 |

浜離宮朝日ホール▶浜離宮ランチタイムコンサート vol.133 御喜美江アコーディオン・リサイタル 月に1回、平日の昼時にクラシックを楽しめる好評シリーズです。2月は多彩な表現力で世界的に活躍するクラシック・アコーディオン奏者、御喜美江(みき・みえ)が登場。グリークの「叙情小曲集」など心温まる作品を届けます。

2/27(金)11時半開演(2,900円) ●問い合わせ：03-3267-9990 ●http://www.asahi-hall.jp

日経ホール▶小澤真智子 NYアーバン・タンゴ・トリオ 米国の拠点にタンゴの魅力を発信し、ニューヨークでも数々のメディアが絶賛。アドリアン・エンリケス(ピアノ)を迎えた新生NYアーバン・タンゴ・トリオが、ピアソラ、フリアン・プラサなどを演奏します。

3/3(火)18時半開演(3,500円) ●問い合わせ：03-3943-7066 ●http://www.nikkei-hall.com

サントリーホール▶被災地の高等学校吹奏楽部生による「みちのくウインド・オーケストラ vol.3」 岩手県の気仙・釜石・遠野・宮古地区の高校吹奏楽部によるオーケストラ。日野皓正(トランペット)、勝山雅世(オルガン)の演奏とともに楽しみください。入場(公募抽選)については下記まで。

4/1(水)17時開演 ●問い合わせ：0570-55-0017 ●http://suntory.jp/HALL/

王子ホール▶MAROワールド Vol.25 “ベートーベン Part.IV” N響コンサートマスターの篠崎史紀がホストを務める王子ホールの看板シリーズ。今回はベートーベンが少年時代に作曲した、知られざるピアノ四重奏曲をお届けします。

3/20(金)19時開演(7,000円) ●問い合わせ：03-3567-9990 ●http://www.ojihall.jp/

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ☎3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ ☎3503-2724
- 受付 ☎3503-2721
- 会員事務 ☎3503-2727
- 経 理 ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：136社 ●基本会員：754人 ●個人会員：1,381人
- 法人・個人賛助会員：62社・141人 ●特別賛助会員：96人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：84人
- 計：198社・2,468人

クラブ賞候補に8人、特別賞候補に7件が推薦

2015年度の日本記者クラブ賞と同特別賞の会員からの候補推薦は1月末で締め切りました。「クラブ会員または法人会員社に属する個人」が対象のクラブ賞には8人が、「原則として会員以外のジャーナリストやジャーナリズム活動」が対象の特別賞には7件が推薦されました。

今後は、推薦委員会(個人D会員8人で構成)がまず審査し、ふさわしい候補を選考委員会(総務委員15人で構成)に具申します。内規により、推薦委員は、特別賞について会員からの推薦以外でも適格と思われる候補を独自に推薦できます。4月に選考委員会を開き、授賞者を理事会に答申、理事会が決定し発表します。贈賞式は5月27日、社員総会の日に行います。

春の異動 会員登録変更のお届けを

——役職変更もご連絡ください——

会員の入会、退会には所定の「変更届」があります。変更は会員資格委員会にはかられます。変更のある場合は事務局の青山(電話03-3503-2727 e-mail aoyama@jnpc.or.jp)へご連絡ください。役職変更だけの場合もお知らせ願います。

<法人会員代表変更>

中国放送 大原健嗣報道制作局長(旧・徳光国弘)

<訃報>

澤野正美会員(日本海事新聞取締役営業局長、59歳)が1月12日、ジャック・ルイルリー会員(AFP通信東京支局長、61歳)が同18日肺がんのため、長谷川洋三会員(日本経済新聞出身、71歳)が同20日膵臓がんのため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

HP → <http://www.jnpc.or.jp/>

NEW!

■会見詳録 1月のアップロード

- 民主党代表選立候補者討論会(2015.1.8)
- シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」⑨ 渡辺靖・慶應義塾大学教授「アメリカにとって『戦後』とは何か」(2014.12.12)
- 研究会「イスラーム国をめぐる諸問題」 田中浩一郎・日本エネルギー経済研究所中東研究センター長、保坂修司・同副センター長(2014.12.4)

■会員エッセー 私の取材余話

- 松尾好治会員(共同通信出身)「ニクソンからフォードへ手探りの経済秩序」

2月の行事予定(2/4現在)

17⑩	14:00~15:30 宴会場(9階) 著者と語る 『ジャスミンの残り香—「アラブの春」が変えたもの』田原牧 中日新聞・東京新聞記者
23⑪	14:00~15:30 10階ホール シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」 宮本康昭 元裁判官・弁護士

会報委員会

- 委員長=石川 一郎
委員=荒田 茂夫 五十嵐 裕 大寺 廣幸
風間 晋 神田 由紀 北村 節子
佐塚 正樹 高橋 茂 長澤 孝昭
吉野 理佳

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：中西 幸大（神戸新聞社映像写真部）



阪神・淡路大震災の年に生まれた歌「しあわせ運べるように」を歌う新成人たち
=2015年1月12日、ノエビアスタジアム神戸

災害列島の教訓

あれから、もう20年たったのかと思う。あのとき生まれた子が、もう成人式を迎えた。1月12日、神戸市兵庫区のノエビアスタジアム神戸で開かれた神戸市主催の成人式には、約9800人が振り袖姿など盛装で参加した。一見、華やかではあるが、新成人にとっては、親から当時の状況を聞くにつけ感慨深いものがあつたに違いない。

1995年1月17日の阪神・淡路大震災では6434人が犠牲（他に行方不明3人）となった。2011年東日本大震災の死者は1万5889人、行方不明2594人だ。昨年は57人の犠牲者を出した御嶽山の噴火に続いて、犠牲者こそ出していないものの阿蘇や桜島、口永良部島（鹿兒島）と火山の噴火活動が活発化している。74人の犠牲者を出した広島市の土砂災害もあつた。

まさに日本列島は災害列島だ。それは列島が太平洋とフィリピン海、ユーラシア、北米の4つのプレートとの境界に位置する以上、免れない宿命といえる。過去の大地震発生のインテラルからして東海、東南海、南海大地震の発生が警告されて久しい。しかし、備えはできているのか。

東北地方には「津波でんでんこ」という言葉がある。津波が起きたら、まず一人ひとりがつんでんばらばらに逃げる。「自助」第一だ。自助でできてこそ「共助」できる。実際、阪神・淡路大震災でも隣近所の人に救い出された人が多かった。最後は「公助」だが、公助を当てにし過ぎてはならない。

（井芹 浩文）